

説教「あなたがわたしと共にいてくださる」

詩編 23 編

1997.7.16

日本バプテスト同盟

日本バプテスト神学校礼拝

今朝は詩編 23 編を味わってみたいと思います。これは最も愛され、暗誦され、また歌われている詩編であります。スポルジョンは「詩編の中の真珠」と呼んだということです。これは、神への信頼を詠ったものと言われます。そこには、神と神の民あるいはイスラエル個人との間の深い愛と真実の関係が詠われています。

まずざっと見てみますと、主は私の羊飼いでられる、という言葉で始まっています。羊飼いと羊の群れをもって神と民ないし個人との関係を表現するのはイスラエル独特であり、長い間のイスラエルの半遊牧生活から生まれたものであります。純粹の遊牧は羊のみで生活するベドウィン等に見られますが、しかしイスラエルは耕したりもする。いずれにせよ、イスラエルは今日でも、エルサレム近くの丘陵地帯とかガリラヤ地方など、どこでも羊や山羊を飼っている姿を見ることができます。

そうしたなか、太陽の照りつける乾燥した地方で山羊や羊と共に歩き、やがてオアシスのある所に来ると、カラカラに渴いた喉を、人も家畜も潤します。しかも、そこが木陰であるなら、これほど素晴らしい憩いの時はありません。羊の群れを導く羊飼いは水の湧き出る場所をちゃんと知っている。そのようにして主はその民とまた個人の必要をいつも満たしてくれるので、「わたしには何も欠けることがない」(1) と告白しているわけです。そして、憩いの水のほとりで心も体も休息を与えられ、その結果、魂が生き返らせられます。リフレッシュ (re-fresh) される。主はこのように、疲れを癒やしてくださる。また、魂が弱って心が病むとき、心の深いところで生き生きとした力と元気を回復させてくださるのであります。さらにそれだけでなく、4 節にあるように、たとい「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない」とまで、彼は告白します。なぜなら、「あなたが・・・共にいてくださる」(同) からです。

死の暗闇や死の恐怖の中に置かれるようなときでさえも主が共にいてくださる、と思うと、怖くない。恐れない。それは素晴らしい信仰です。主が共にいてくださる。それは聖書を貫いて多くの箇所に出てくる言葉であり、歴史を導き給う主がイスラエルの民に、また個人に対し、特に族長や指導者、預言者などに御自身を現すとき必ずと言っていいくらいに言われている言葉です。

例えば、ヤコブが兄の怒りを逃れて一人旅を始め、ベテルで石を枕に寝たとき、孤独と不安のヤコブに「見よ、わたしはあなたと共にいる」と言われ、また売られたヨセフが見知らぬエジプトで不遇の生活を強いられたとき、「主は彼と共にいたので・・・」とたびたび言われています。そのようにして、逆境の中にあっても、それに耐えていく力を与えられたのです。モーセの召命の記事を読むと、そこでも主が繰り返して「あなたと共にいる」とモーセを励まし、同胞救出の決断へとエジプトに向けてモーセを導く様子が見て取れます。

しかも、このような個人的な神との出会いだけではありません。イスラエル民族の歴史を貫くものとして、その民族としての歴史の経験からも、この詩編の言葉は当てはまるのであります。その最も典型的なものはエルサレムの滅亡であり、滅亡の後もなお半世紀にわたってバビロンや他の外国の地に拘束され、捕虜生活をおくらされたという苦難の経験です。彼らは民族として、死の陰の谷に行く苦悩を経験しました。ですから、「苦難の僕しもべの歌」と言われ、イザヤ書 52 章 13 節から 53 章 12 節にかけて描えがかれている僕は個人でなく、苦しみ抜いているイスラエル民族という団体のことである、とユダヤ人の学者は主張して譲らないほどです。

続けて、「あなたの鞭むち、あなたの杖つえ、それがわたしを力づける」(4)とあります。羊飼いの鞭や杖は襲いかかる野獣を討ち払ったり、また迷う羊を引き戻すために使われたと言われます。いずれにせよ、主は時として、鞭や杖によって民や個人に戒めをお与えになると言います。そうすることによって、主は御名みなにふさわしく正しい道に人を導かれると言うのです。神から見放され捨てられたと思うような苦しい出来事に遭あうことがある。それはたしかに、痛い苦痛には違いない。けれども、それは後になってみると、かえって私を慰めてくれものとなる、と告白しています。これは理屈ではなく、経験して初めて分かってくる神の真実であり、信仰の真実であると言えましょう。

5 節に来ると、状況は一変しています。神殿に詣でて、そこで犠牲をきさき献げている様子が伺えます。イスラエルの人々は苦難に直面するとき神に助けを求めて祈りますが、そのとき「神よ、この苦境から救い出してくださいならば、これこれの犠牲をあなたにお献げします」と、こう誓いを立てて主に願います。「誓願きさきものの献げ物」という種類の犠牲がそれです。そして、そのように主に守られて救われたとき、神の御前みまへに出て、約束した犠牲を献げるのです。その際、献げる人も動物の肉の一部を神殿の庭で食べることができます。それは喜びと感謝の宴うたげとなります。「あなたはわたしに食卓を整えてくださる」とは、そういうことを詠うたっているのでしょうか。今や、主はこの彼の食卓のホスト役を務めてくださるのです。

そして、頭に香油を注いでくださる。先週、K 姉によりイエス様に香油を注ぐ話が出てまいりましたが、ホストがここで客をもてなし、旅にやつれた頭や顔に香油を振りかけて心地こころよい気分にしてくれます。さらには、杯に溢あふれるばかりのぶどう酒を注いで、歓待してくださる。主がこんなにも

豊かにもてなしてくださる、と詩人は詠うのです。

そのようにして、まとめとして、6 節に結びの言葉が来ます。

恵みと慈しみ、それは主の真実から溢れ出てくるものです。これまでの歴史を振り返り、また人生を回顧するとき、苦難を経、死の闇の中に置かれたときももちろんあったのですが、それにもかかわらず、主の恵みと慈しみはずっと歴史を通じ、また生涯を貫いていつも私の後を追いかけてきた、と告白している。「追う（ラーダク）」は「追跡する」「追いかける」という意味です。主はそれほどに、見えない御手をもって恵みと慈しみを下さった、と言うのです。

「主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう」。ここでは、主の家に「住む」という訳と、この新共同訳のように主の家に「帰る」という訳があります。ヘブライ語を「シブティ」と読むと「住む」、「シャブティ」と読むと「帰る」になります。「帰る」と訳せば、「また次の機会にも、神殿に詣でるためにやってきます。生きている間、ずっと続けます」ということになります。主の限りない慈しみに応え、生涯、主の御前みまえに出て感謝と賛美ささを捧げます、と誓いをしているのです。

これはまさに神への徹底した信仰を教えたものであり、主を信じて生きる者にとって共感を呼ぶ不朽の詩編で、まさしく「詩編の中の真珠」であります。

最後に、23 編を貫いている特徴は、「わたし」という言葉が終始一貫、強調されているということです。ほかの誰でもない「このわたし」が主と深い繋がりの中にあって結ばれていることが告白されています。新共同訳では省いておりますが、「主はわたしの羊飼つない」(1)であります。続けて、「わたしには欠けることがない」(同)。2 節「主はわたしを」。3 節「魂を生き返らせて」も、「わたしの魂を」です。さらに、同「主はわたしを正しい道に導かれ」、4 節「わたしは災いを恐れない」「あなたがわたしと共に」「それがわたしを力づける」、5 節「わたしを苦しめる者を」「わたしの前にしても」「わたしに食卓を」「わたしの頭に」「わたしの杯を」、6 節「恵みと慈しみはわたしを追う」とあるとおりです。これほどふんだんに「わたし」が出てくる詩編も珍しいのです。

信仰の本質は「我 信ず」であります。誰が何と言おうとも私はこれを確信する、そういう主体的な信仰がここに際立って表明されています。私たちはこのように、いつも主に向き合い、主の豊かな恵みと慈しみを確信して、「どんな苦悩や恐れにあっても、主がこの私と共におられる」という信仰を常に新たに新鮮にさせていただきたいと思えます。

今週で、神学校の授業を一応、終わります。たくさん宿題がありますが、この夏の皆さんのそれぞれの活動の場において神が共にいまして支え励まし導いてくださることを祈ります。

詩編 121 編 7、8 節を読んで終わります。「主がすべての災いを遠ざけてあなたを見守り、あなたの魂を見守ってくださるように。あなたの出で立つのも帰るのも、主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに」